須賀川市教育研修センター・教育支援センターだより

「みち」 第 141 号

令和５年　１２月１５日 発行

小・中・義務教育学校の「指導訪問」を終えて

今年も、11 月 20 日の大東中学校の指導訪問を最後に予定された 13 校の「指導訪問」を終えることができました。各校におかれましては、それまでのご準備にご苦労されたことも多かったと思います。校長先生はじめ、教職員の皆さまに感謝申し上げます。

さて、今年度の指導訪問を終え次のようなことを感じました。

児童生徒を主体とした授業づくり

どの授業も、児童生徒を中心に据えた授業を展開しようとし、教師の一方的な講義形式の授業がだいぶ少なくなりました。児童生徒が課題に向き合い、共に学び合おうとする姿を目にし、今求められている学びの大切さを感じることができました。

中には、友達との関わりが苦手で、離れて学習する児童の姿も見られました。しかし、教師がその児童の行動の意味を理解し、適切な働きかけと友達との関係性が作られていたのでしょう。その児童はその後、自分の席に戻り友達の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりする様子が見られました。一人一人が自分の学びを大切にしながら協同的な学びを展開していくことを願ってやみません。

さらなる高みを目指して **jump !!**

安心して過ごせる学級づくり

授業の主体は児童生徒であり、そのサポートをするのが教師です。

教師の一言やかかわり方は授業つくりの土台となるものです。声の大きさや速さ、声のかけ方などを意識することで学級が安心した場所になり、児童生徒が意欲をもって友達と共に学習に取り組むことができます。

また、教室環境も同様です。子どもたちが帰った後、机がそろいゴミがない教室はその日一日、子どもたちが安心して学んだ証なのかもしれません。

先日、学校支援に出かけた際、このような生徒に出会いました。

「僕は声を出すと読むのに時間がかかるし、分からなくなるんです。
でも、黙って読むと分かるんです。黙って読んでもいいですか？」

と言って指で文章をたどり、あらすじをたどってくれました。

目で文章をたどりながら、音読をして、内容を理解する子。
指で文章をたどりながら、黙読をして、内容を理解する子。

いろいろな子がいます。学習の仕方は異なりますが、一人一人の学びを保障して児童生徒の「できた！わかった！」の笑顔を引き出したいものです。

『子どもへの声掛け』

体罰や虐待まではいかなくとも知らず知らずのうちに適切でない発言や指導で子どもの心を傷つけ、追い込んでしまう。

そんな子どもを追い詰める言葉「毒語」をつい出していないでしょうか？

ちゃんとしていることが正義。「ちゃんと」という言葉が呪縛のようにのしかかって高圧的な指導を当たり前と思ってしまう構造こそが問題なのです。（中略）子どもたちは、教師の雰囲気を敏感に受け取ります。担任が、ちゃんとできない子への指導や叱咤を繰り返し、ため息をつく姿を見せるうち、子どもたちがルールから逸脱する子を無視して教師に告げに来る「ネガティブ報告」が増えます。枠からはみ出す子を排除する教室の雰囲気ができ、その空気が不登校やいじめにつながることがあります。

【毒　語】
- ○何回言われたら分かるの？
- ○どうしてそういうことするの？
- ○やる気がないんなら、もうやらなくていいです。
- ○早くやらないと、○○させないよ。
- ○お母さんに言おうか。
- ○そんなこと、小学生でもやりません。
- ○じゃあ、もういいです。

令和５年 10 月９日付け
朝日新聞　川上康則さんの記事より

この言葉を言われた子どもはどんな気持ちでしょう？

上の言葉を他の言い方に変えて子どもたちの言動を促すことはできないでしょうか？

ひと呼吸おいて、深呼吸。数秒数えてみませんか？

コラム「臨時授業づくり研修会(小学校)の MI」　《No.05》

臨時の授業づくり研修会が小学校と中学校で実施され、筆者も小学校の研修会に参加しました。このコラムでは不可能を可能にする MI(Mission Impossible)について書いてきましたが、今回はそこで出会ったすばらしい学びの MI についてです。

研究授業は 6 年生。「これから算数の学習を始めます」「お願いします」のやわらかい声から授業が始まりました。中学校に体験入学したばかりの子どもたちは、中学校レベルの問題 2 問にチャレンジします。立体の体積についての深い探究です。問題が配布されてすぐグループの探索的会話が始まり、聴き合い、支え合い、深い探究の学びが最後まで続きました。チャレンジが終わって先生が「これでみんな中学校に行けるね」と言うと、中学校に胸ふくらませる顔つきになった子どもたちは「もう少し、小学校にいたい」という声ももらしました。中学校への憧れと期待とともに、こんなに深くみんなと学び合える小学校にももう少しいたい」そんな感じが伝わってきました。

事後の研修会も、有意義なコメントや質問が出され充実しました。質問の一つに、わからない子に他の子が教えたり、先生が、わからないグループに他のグループの子が教えるように勧めたりする場面があったが、「教え合い」にならないのはどうしてかというご質問がありました。（教え合いは、学び合いと似て非なるもので、要注意です。）講話の中で筆者は、正解を出した子が評価される「正解を求める場」になっていないからですとか、聴き合いと高い課題の両方が深いレベルにあるからですと、一般的な、つまりピント外れの答えをしました。

その後、校長室で、授業者の先生や参観した先生方との話し合いが筆者に教えてくれました。わからない子の苦しさを他の子もみんな感じて共有しているから…。それに、みんなでなんとか応えようとしているから…。その子がわかるように伝えるにはどういう言葉を使えばいいか深く考えているから…。その子がわかった時、自分もうれしいから…。聴き合い、支え合う子どもたちは、みんながつながるクラスの学びを生み出しているのでした。

さて、講話で言わなかったことがあります。いつも算数のテスト 30 点だった子が、6 年生になって 100 点をとるようになったと校長先生から聞きました。その子は、授業中身を乗り出してくい入るように他の子の言葉を聴いている数人の中の一人です。一問目はほとんど一言も発しませんでしたが、深く聴く中で「立体の感覚」をつかんだのでしょう、二問目は積極的に探索的会話に加わっています。聴き上手学び上手になったこの子は，何より学びが好きになったのでしょう。そして生涯学び続けるのでしょう。そんな風に思えました。

わからないことを大切にし、探究の対話を交わし合う子どもたち。5,6 年の 2 年間で圧倒的に育った全員の子どもたち。30 点だった子がいつも 100 点をとる学び上手になる。テストの点数のことなので講話では言わなかったのですが、このことは子どもたちの可能性がいかに大きいかを示していると思います。点数だからと言ってこの可能性を言わないことは、子どもたちにも、そしてその可能性を信じて伸ばそうとする須賀川の先生方にも失礼と思い直し、書くことにしました。子どもたちの可能性を信じ育てる須賀川の教師たちの可能性も大きく無限なのかもしれません。

子どもたちの学びを見ながら、この子たちは 21 世紀のこれからを、こうやってつながり合い支え合い、ともに生きて行くのだなぁと涙ぐんでいる筆者でした。

今年も残すところ、あとわずか。インフルエンザの流行で学級閉鎖や学年閉鎖の声が聞かれます。冬休みにはこれまでの疲れを癒し、心穏やかに新年を迎えられますようご祈念申し上げます。